太郎のみたゆめ

かつお きんや・作
なががわ そうや・絵

N. D. C. 913

かつおきんや
太郎のみたゆめ
牧書店　1974年（昭和49）
156p. 22cm（児童文庫・3）

基本カード記載例

児童文庫3

■太郎のみたゆめ

＊

一九七四年二月二〇日　第一刷発行

＊

■著　者　かつおきんや

■発行者　牧　芳枝

■発行所　株式会社　牧　書　店
東京都新宿区揚場町一
電話（269）2081～4
振替・東京196483

■本文・口絵印刷所　株式会社　文唱堂

■装丁印刷所　小林美術

■製本所　ナショナル製本協同組合

乱丁・落丁の本は、おとりかえいたします。

(分)8393　(製)10003　(出)7909、

© Kinya Katsuo 1974 Printed in Japan

太郎のみたゆめ

太郎のみたゆめ

かつおきんや・作
なかがわそうや・絵

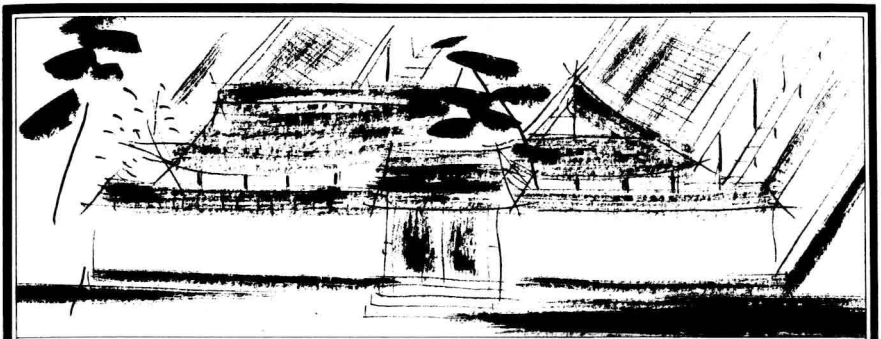
65776

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

むかしむかし、能登に、太郎という男の子がいました。大きくなってからは、能登の太郎とよばれるようになりますが、はじめは、ただ太郎とよばれていました。

太郎は、おとうさんの顔も、おかあさんの顔も、すこしも知りません。生まれてまもないころ、小さなかごにのせられて、入海の岸でただよっていたのです。

能登の羽咋から金丸、高畠にかけて、いまは潟になっていますが、そのこ



ろは、ずっと深く入りこんだ入海になっていました。その一番奥の小田中という所に、長者がすんでいました。ある日、入海の岸を歩いていた長者は、小さなかごにのってただよっているあかんぼうを見つけたのです。

「オギャア、オギャア、オギャア。」

あかんぼうは長者の顔を見ると、きゅうに小さな手をぐるんぐるんふって泣きだしました。

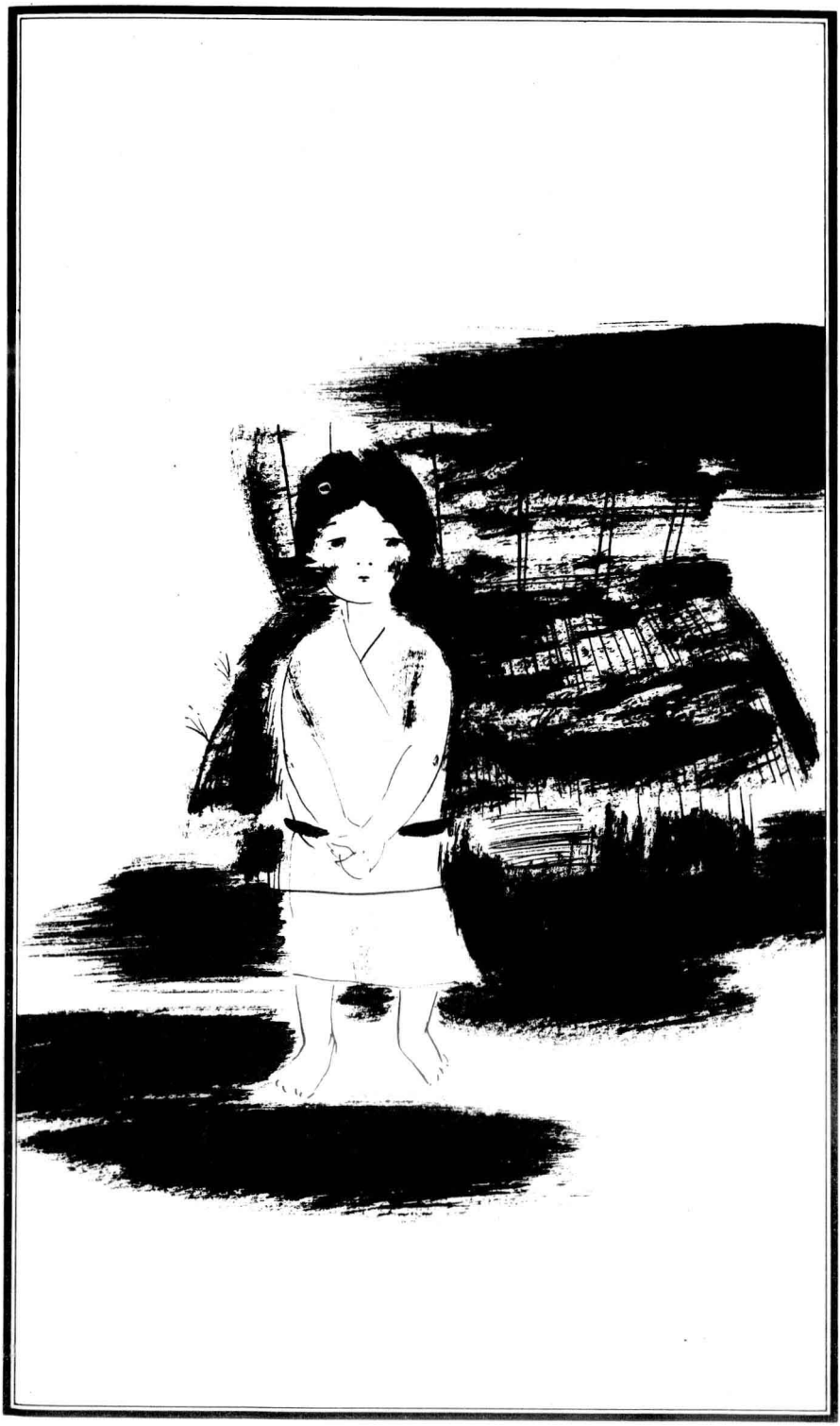
「なんとでかい声で泣くあかんぼうじゃい。大きくなったら、ちっとは役にたつかもしらぬ。」

長者は、やしきへつれていき、太郎という名をつけて、そだてることにしました。太郎は、よくたべ、よくねむりました。

「くうてはねむり、ねむってはくい、なんとてまをくうやつじゃい。いまに、たっぷりお返しをしてもらわにゃならん。」

長者は、そういって、やしきの者には、

「あいつの腹は、底なしじゃ。あんまりくわすな。もったいない。」
といいつけました。でも、太郎は平気です。やっと歩けるようになると、入海の岸へいって、あさりやはまぐり、のりなどを取って、むしゃむしゃとたべました。秋になると、かきの木によじのぼってかきを取り、くりをひろい、あけびをもぎ、いつもなにかをたべていました。
太郎が、五つになると、長者はいいました。
「おまえは、わしがひろうてやらなんだら、とっくに死んでおったはずじゃ。ありがたいと思え。そのお礼に、せっせと働け。」
そして、たきもの取り、草かり、水はこび、すずめの番など、次から次へと仕事をいいつけました。太郎は、大きな子にまじってまけずに働きました。
村の人びとの中には、太郎にやさしくしてくれる人が、なん人もいました。中でも、ゆりという女の子のいる家では、太郎にたべものをくれたりし



ました。ゆりは太郎と同じぐらいの年で、その家は、村で一番びんぼうでした。でも、心のやさしい人たちでした。

太郎は、十ぐらいになると、村の若いしゅうと同じほどの仕事をするようになりました。

「ふっふっふ。やっぱり、あいつをひろうてやってよかったわい。」

長者は、ひとりでよろこんでいました。そのくせ、太郎を見るたびに、

「なにをあそんでばっかりおるんじゃ。このどうらく者の、ごくつぶし！」

と、どなりたて、いつも持っているつえで、太郎をたたこうとします。太郎は、ぱっととびのいて、つえのとどかぬ所へいき、大声ではやしたてます。

「ここまで、おいで、鬼さん、こちら。」

長者は、足をばたばたさせてくやしがり、太郎は、さっさとかけていってしまいます。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

さて、ある春のあたたかい日のことです。朝から山ばとがクルクルプッポウ、クルクルプッポウと、たのしそうにのどをならし、すずめがチュンチュクとびまわる、ほんとうにいいお天気です。太郎は、村の若いしゅうといっしょに、うらの松山へたきもの取りにでかけました。

山といっても、そう高くはありません。たくさんの松のあいだに、すぎや竹もしげり、けやきもあかるい日ざしをうけて、もう芽をふきだしそうです。

太郎は、みなといっしょに、冬のあいだにおれたすぎや松の小枝をひろって歩きました。しばらくするうちに、大きなたばができました。

「おい、いい天気やさかい、一ぷくせんか。」

「きょうは、よう、はかどったなあ。」

「さあ、一ぷく、一ぷく。」

みなは、たばねたたきものをほうりだすと、見はらしのよい、西向きのお

かの上に、腰をおろしました。

目の前の入海は、波ひとつなくなめらかで、ぼんやりとかすんでいます。白い鳥がかるがるととんでいます。入海の向こうは、ひくいなだらかな山が、まるで女の人のまゆ毛のようにのびています。

「ああ、ねぶとうなってきた。」

「おいや。」

すぎなが一せいに芽をふいて、やわらかいじゅうたんのようです。太郎たちは、ごろんとひっくり返りました。

うっすらともやのかかった青空です。とんびがゆっくりわをかいています。さまざまな鳥の声がします。

「どれ、いっちょう、いいゆめでも見るか。」

だれかがいいました。それを聞きながら、太郎も、ひきこまれるようにねむってしまいました。

そのころ、ゆりは、村の女しゅうといっしょに、あおもの取りに山へきていました。ぜんまいが、かれ草のあいだから、にょきっ、にょきっと、にぎりこぶしをふりあげるようにはえています。それを、つんでは、腰につけたふくろに入れ、歩きまわるうちに、太郎たちがねむっている所へやってきました。

「まあ。ごろごろと、浜にうちあげられたいるかみたい……。」

そして、ゆりは、太郎のね顔を見て、つぶやきました。

「なんと、たのしそうな顔をして。」

太郎は、ゆりがこれまで一度も見たこともないほど、たのしそうな顔をしてねています。

「よほどいいゆめを見てるにちがいないわ。」

と、ゆりは思いました。ほかの若いしゅうのね顔も、さまざまです。

「あら、この顔は、火男が火をふいてるみたい。」

「この顔は、泣き男。どうして、あんなにぺったりとまゆ毛がさがるのかしら。」

ゆりがひとりで笑っていると、やがて、みんな目をさましました。

「ああ、ようねたわい。」

両手をひろげて大きくあくびをしたりして、次つぎと起きあがります。

「おもっしいゆめ見たぞ。でっかいなまずがおったもんで、つかまえようとしたら、そいつめ、不動滝へはいろうとするんや。もうちょっこしで、ひきずりこまれるとこやった。」

などと、いま見たゆめの話をする者もいます。

太郎は、一番おしまいに起きあがりました。よごれた顔がなんだか、つやつやしています。

「太郎、おまえはゆめを見なんだか。」

「……。」

でも、太郎は、まだゆめの中にいるのでしょうか、なにも答えません。

「太郎。とってもたのしそうな顔しとったよ。どんなゆめ見とった？」

と、ゆりが聞きました。太郎は、にこっと笑って、

「なんともいえん、いいゆめやった。ほんとの福ゆめや。」

そして、そのゆめをにがすまいとするように、目をつぶって、大きくいきをすいこみました。まるいほおが、まっかです。よほどいいゆめだったのでしょう。ゆりは、そのゆめがほしくてたまらなくなりました。むかしから、いいゆめを見ればその人に福がくるし、人に話せば聞いた人に福がくると、よくいいます。あの長者など、これまでに三回もゆめを買い、それで長者になれたという話です。

「なあ、太郎。おらにゆずってくれんか、そのゆめを。」

と、ゆりはたのみました。

太郎は、だまっています。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com